

第1回 札幌市立高等学校教育改革方針検討会議 議事録

日 時：平成28年1月28日 10時～12時

場 所：札幌市役所本庁舎18階 第3常任委員会会議室

出席委員：大原委員、岡部委員、鈴木伸明委員、手塚委員、近藤委員、山下委員、林委員、鈴木恵一委員、佐藤委員、石黒委員、尾崎委員、鳴海委員、濱野委員、久保委員、川嶋委員、土佐林委員

欠席委員：相沢委員

事務局：長岡教育長、引地学校教育部長、仙波教育推進課長、長谷川教育課程担当課長、小林高等学校プロジェクト担当係長、広川中等教育学校担当係長、宮田高等学校担当係長、幸丸高等学校担当係長、藤田学事係員、岡本学事係員

1 開会

2 札幌市教育委員会教育長挨拶

開会にあたり、札幌市教育委員会の長岡教育長が挨拶を行った。

3 出席者紹介

席順に、出席委員から自己紹介を行った。

事務局出席者の紹介を行った。

4 会長・副会長の選出について

石黒委員から、事務局案の提示を求められ、事務局から会長に大原委員、副会長に岡部委員を提案。

事務局案について、全出席委員の賛同を得たため、会長に大原委員、副会長に岡部委員を選出。

5 会長・副会長挨拶

<大原会長>

○札幌市として、広く将来の市立高校全体をどのような形にしていくかについて、学校関係者のほか、若者や経済界の方などと議論していきたい。

<岡部副会長>

○教育学の高校教育課程が専門で、市立高校には、研究のみではなく、教育面・実践面でも関わる機会が多い。

○学習指導要領改革を含め、これからの教育改革の本丸は高校改革に関わるものであり、札幌市として「これからの学校の在り方」を考えることは非常に意義があることで、良い意見交換をしていきたい。

6 事務局説明

仙波教育推進課長から、下記(1)及び(2)について説明。

(1) 教育改革方針の概要と方針策定に向けた協議の進め方

- 幼稚園、義務教育での学びを基礎として、市立高校において、生涯にわたって学び続ける力を育成していくために必要なこと、少子化に伴う中学校卒業者の減少期における「市立高校の在り方」を示す必要がある。
- 改革方針は、今後10年程度の基本理念を示す「(仮称)市立高校教育改革ビジョン」と概ね5年間の具体的取組を示す「(仮称)市立高校教育改革実行プラン(第1期・第2期)」で構成。
- 改革方針の策定は、この検討会議と、教育委員会事務局に設置する検討ワーキンググループ会議で、それぞれの検討内容をフィードバックしながら検討を進める。
- 平成29年3月を目途に、教育改革ビジョンと第1期の実行プランを策定する。
- 会議は今回を含めて5回程度を予定している。

(2) 市立高校をめぐる現状と課題

- 中学校卒業生数の将来推計は、急減、急増を繰り返すものの、全体的には明らかに減少傾向。
- 各校の特色化の取組などは一定の成果を上げ、生徒等から高い評価をされている一方、課題もある。これらの成果や課題を踏まえ、今後の検討の視点として、次のものが考えられる。
 - ・生徒一人一人の個性や能力、興味・関心、進路希望等に応える教育活動の展開
 - ・大学や企業などと連携した、生徒の学習意欲を引き出す多様な学習機会の提供
 - ・教育課程の改善を含めた、教員の実践的指導力の向上
 - ・学校を支援する仕組みの構築による、学校運営力の向上
 - ・少子高齢化社会において求められる学校の在り方

7 意見交換

各委員から出された主な意見は以下のとおり。

【特色ある取組に関して】

- 特色ある学科やコースを設置している学校において、その特色ある取組が普通科や普通コースの生徒にも広がりつつある。様々な機会を通じて、生徒にいろいろな経験を積ませることが重要である。
- 特色ある学科の取組を普通科に広げたことで、普通科の生徒が課題探究学習やプレゼンテーションなどに取り組む機会が非常に増えた。普通科の中には、海外研修に行く生徒もおり、これを契機として海外に目が向き、高校卒業後、アメリカの大学に進学した。

【生徒の学習ニーズ等への対応に関して】

- 単位制を導入することにより、カリキュラム上、多様性や選択の可能性を広げることは理解した。一方で、特色ある学科を選んだがイメージと違い自分には合わないという生徒や、普通科を選んだが、特色のある学科等の授業に興味をわき、そちらで学びたいという生徒もいる。そういった生徒の学習ニーズへの対応も必要である。
- 「コズモサイエンス科に入学したが、文系の大学に進学したい」という生徒もおり、コズモサイエンス科のカリキュラムと本人の将来像がかみ合わずに苦勞していた。そういった状況があることを見逃さないでほしい。

- 悩みなどを抱えて学校に適応できない生徒が一定程度いる。スクールカウンセラーの配置などは行っているが、困りを抱えている生徒を支える体制や仕組みづくりが求められている。
- 1年間、現在の学校で学んでみたが、別の学校で学びたいというニーズに応え、例えば、市立高校間の単位互換や、同じ学校の中（学科間）で、よりフレキシブルに科目履修できるようなことも考えられるのではないかな。

【高校教育の実践等に関して】

- 自分で課題を発見し、探究する力を伸ばし、大学進学がゴールではなく、進学後、また社会に出てから必要となる力を身に付けられるような教育が必要である。
- これからは、学校の中だけで完結する教育ではなく、学校外に目を向け、外部の資源を活用した教育が重要になる。
- グローバル化に対応する教育が求められているが、「グローバル」を支える前提として「ローカル」の視点がある。地域に貢献する人材をどのように育成するかという視点での教育も重要である。
- 国の補助事業などの指定を受けると、当初は大きな予算も付いて事業の実施も円滑であるが、指定が外れた後は予算も減り、事業の実施が年々難しくなる。予算が付いている間は良いが、それがなくなった後、どのように継続させていくのかということが非常に重要。継続して実施することを担保する仕組みを考えていかなければならない。

【取組の情報発信に関して】

- 市立高校の良さについて、個々の学校における発信はもとより、市立高校全体として、もっと情報発信していくべきではないか。情報発信されることで、生徒の自信にもつながる。
- 高校を選択する際に市立高校の特色があまり見えない。市立高校の取組が、どれほど生徒や保護者などに伝わっているのか。情報発信力を高めて、特色ある取組が学校選択の基準になれば良い。

8 まとめ

<大原会長>

- 市立高校の取組の成果と課題、市立高校の将来イメージ等について、各委員から様々な意見が出た。市立高校として望まれる形や役割を定め、それに向けて、今後10年間、継続できるシステムや具体的な取組を提案していくことが、我々の仕事であると考えている。ワーキンググループ会議での議論や、その他の様々な意見をフィードバックしながら、今後の検討を進めていく。

9 閉会

次回の日程等について、事務局から事務連絡。

以上